

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

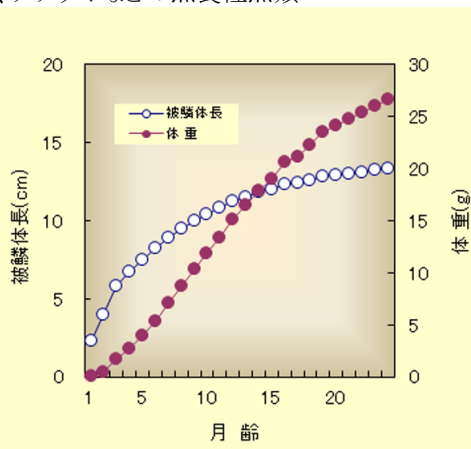
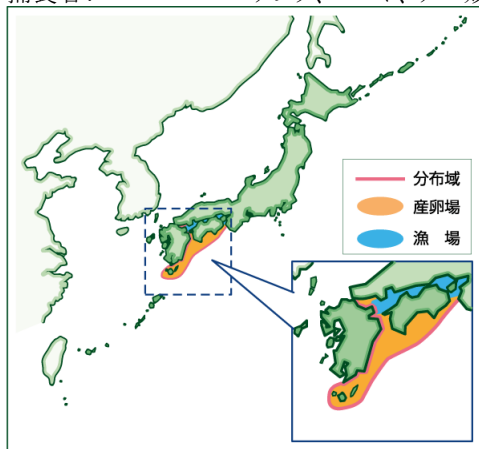
系群名 瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 2歳
成熟開始年齢: 5カ月(55%)、6カ月(80%)、7カ月(95%)、8カ月以上(100%)
産卵期・産卵場: ほぼ周年(主に5~10月)、薩南海域~土佐湾、瀬戸内海のほぼ全域
索餌期・索餌場: 周年、薩南海域~土佐湾、瀬戸内海のほぼ全域
食性: カイアシ類などの小型甲殻類
捕食者: サワラ、スズキ、サバ類、タチウオなどの魚食性魚類

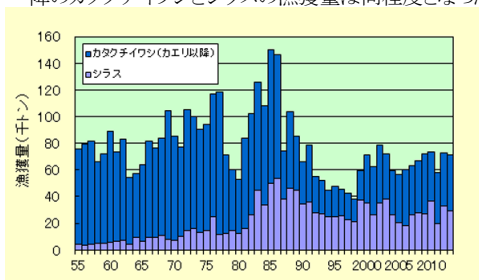


漁業の特徴

主に中型まき網、船びき網によって漁獲される。瀬戸内海では小規模な漁業が大多数を占めているが、本種の漁業への投資規模は大きい部類に入る。シラス~成魚が漁獲の対象となり、特にシラスを対象とした漁業が発達している。漁場は紀伊水道~伊予灘の各海域で形成される。操業期間は外海に近い海域でほぼ周年、瀬戸内海中央部で春~秋である。海域によっては加工に不向きな脂イワシの出現や不漁のために休漁する場合がある。

漁獲の動向

1985年に稚魚期以降のカタクチイワシが10.0万トン、シラスが5.0万トン漁獲された。その後、減少傾向を示し、1990年代後半はいずれも2万トン前後で推移した。1999年から増加し、2013年はそれぞれ4.2万トン、3.0万トンとなった。1980年代から稚魚期以降の漁獲量が減少する一方で、シラスの漁獲量は増加し、1980年代後半以降では稚魚期以降のカタクチイワシとシラスの漁獲量は同程度となった。

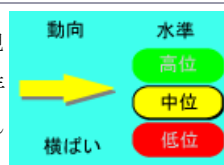


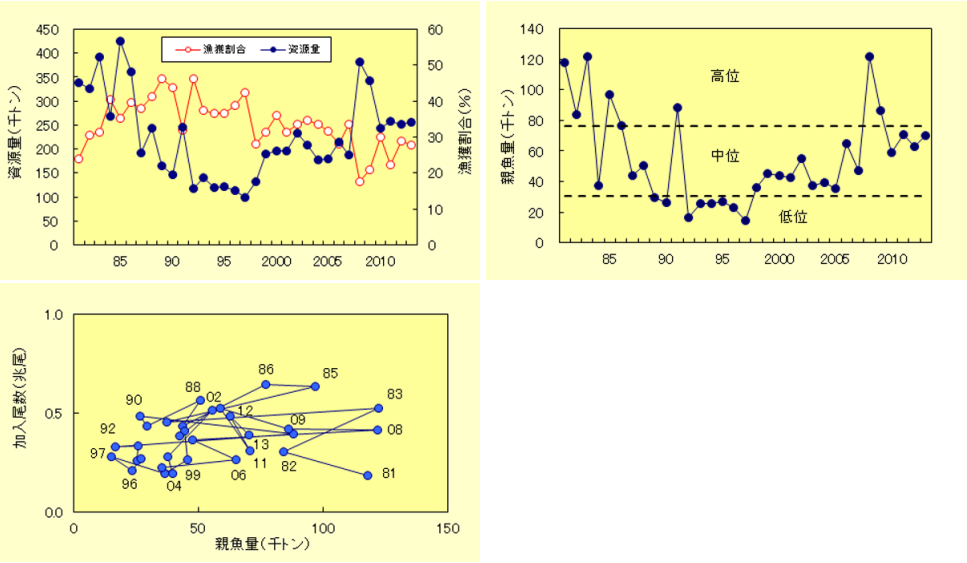
資源評価法

1981年以降の月別年齢別漁獲尾数をもとに、Popeの近似式を用いたコホート解析により月別年齢別資源尾数と漁獲係数を推定した。1~9月齢の最近月の漁獲係数Fは各月齢の過去10年間の12月の平均値、最高月齢(10月齢以上)のFは9月齢と同じ値とした。また船びき網漁業の代表漁協と標本船のCPUEから加入動向、卵稚仔調査結果から産卵量を推定した。

資源状態

月別年齢別コホート解析により推定された資源量は1985年に42.4万トンで最大となった後、1997年の10.0万トンまで減少した。その後増加し、2013年には25.7万トンとなった。親魚量と加入量の間に明確な関係は見られない。シラス対象の船びき網の代表漁協と標本船のCPUEは1990年代に低かったが、1999年に急増した。その後増減を繰り返し、2006年以降は増加傾向にある。1980~2013年の年間産卵量は185兆~1146兆粒で推移し、2013年は889兆粒であった。2013年の資源水準は中位で、資源動向は横ばいと判断された。





管理方策

再生産関係からBlimitを親魚量3.1万トンとした。2013年の親魚量は7万トンで、Blimitを上回っている。資源は中位水準で横ばいであり、比較的安定していることから、2013年の資源水準を維持することを管理目標とし、ABC算定のための基本規則1-1)-(1)に基づきABCを算定した。基準値については、Fcurrentとこれに乘じる係数0.94を決定論的に求めて得た。ABClimitの算定では2014年のFをFcurrent、2015年以降のFを0.94Fcurrentとした。2014年以降の加入量については再生産成功率が過去10年間の中央値で推移すると仮定した。ABCtargetの算定ではFtargetを0.8Fcurrent、2014年以降の加入量をABClimit算定時の80%とした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	52千トン	0.94Fcurrent	1.15	29%
ABCtarget	47千トン	0.8・0.94Fcurrent	0.92	26%

- 漁獲割合はABC／資源量、F値は1月齢魚の1～12月の平均値で示した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 1980年代から、シラスへの漁獲指向が強まった
- 資源量は1985年以降減少し、1997年以降増加した
- 若齢魚のFは経年的に高いが、3月齢魚以上では1990年代以降低下していたことや太平洋系群の資源水準が高位であったことにより、資源は1990年代の低水準期から回復したと考えられる

管理方策のまとめ

- 2013年の資源水準を維持することを目標とした
- ABCは基準値を0.94Fcurrentとし、今後の加入量の仮定値をもとに算定した
- Flimitは0.94Fcurrent、Ftargetは0.8・0.94Fcurrentとした

執筆者: 河野悌昌・高橋正知

資源評価は毎年更新されます。